庄野潤三全集

講談社

庄野潤三全集　第四巻

昭和四十八年十月四日　第一刷発行

著　者　庄野潤三
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一・郵便番号　一一二
電話　東京(〇三)九四五-一一一一(大代表)・振替　東京三九三〇
印刷所　図書印刷株式会社・株式会社興陽社
製本所　大製株式会社
製函所　株式会社岡山紙器所
定　価　一六〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©庄野潤三　昭和四十八年　Printed in Japan

0393-131944-2253 (0)　(文1)

庄野潤三全集　第四巻

目　次

浮き燈台　7
《道》
道　129
南部の旅　171
静かな町　193
なめこ採り　209

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二つの家族 218
ケリーズ島 231
マッキー農園 256
二人の友 302
つむぎ唄 335
庄野潤三ノート 阪田寛夫 496

装　幀・岩　本　正　雄
口絵写真撮影・本　社　写　真　部
（昭和48年5月28日、芸術院賞授賞式控え室にて、東京上野・芸術院会館）

庄野潤三全集　第四巻

浮き燈台

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部

一

昨日の午後、私はこの村へ来て小安(こやす)ばあさんの家に一泊した。今日は風の無い、暖かい日で、海の色が非常にきれいに見える。

十時ごろ、私は小安ばあさんとブロの浜へ行った。ホシコイワシを乾しているところに女が二人働いていた。

「ここらにいそど、居らせんか」

小安ばあさんが聞いた。

「いそどか」

と一人が云った。

燈台の下に出ているかも知れないともう一人が云った。

少し行くと、崖を背にした砂の上に婆さんが三人、焙火(ほたび)のそばに坐っていた。一人は藁をなって

居り、一人は火の中の芋をひっくり返していた。いちばん年取った婆さんは眼をつぶっていた。
「やーい」
と小安ばあさんは声をかけた。
「お客さんか」
芋をひっくり返していた婆さんが云った。
小安ばあさんは三人の婆さんに向ってここの海で難破した船のことを話してくれるようにと頼んだ。藁をなっていた婆さんはいちばん年取った婆さんの耳もとに口を寄せて、大きな声を出した。
「しもうた船のことさ」
いちばん年取った婆さんは眼を開いて、
「しもうた船か」
と云ったが、それきりまた眼も口も閉じてしまった。
「何ぞ話してくれんか」
と小安ばあさんが云った。
すると、芋をひっくり返していた婆さんが、お前こそよく覚えているだろう、わしらより年上ではないかと云った。
「おら、チャンチャンボやで。物覚えが悪いよってよう云わん」
と小安ばあさんが云った。
「なあ、何ぞ思い出してこの人に話してくれんか」
彼女はそれから私にちょっとこの先まで見に行って来るからここで待っていてくれるかと云った。私が待っていると答えると、小安ばあさんは崖の外れにある石段を登って姿を消した。

その石段の下に莚を敷いてもう一人の婆さんが藁を叩いていた。
「全滅するような船はないが」
と榾火のそばで藁をなっている婆さんが云った。
「二人死んだとか、三人死んだとかいうことはようけあったな」
私はこの前ここへ来た時、五十年ほど前に一隻の駆逐艦が難破した話を聞いたが、その時のことを覚えていないかと尋ねた。すると、もう一人の婆さんがあの時は自分は七つか八つであった、どえらい波でひっくり返ったというではないかと云い、いちばん年取った婆さんに向って、
「のえ」
と云った。
しかし、眼をつぶっている婆さんは眼も開けず、返事もしなかった。
藁をなっている婆さんが話した。
その時、わしは小学五年生であった。朝、ふいどろがプープー鳴った。軍艦は向う側の海へしもうた。大波ほうらいで、船にしがみついている兵隊さんが波ではらい落されて死んだ。この在所から救助の船が行き、綱をくわえて泳ぎついて、煙突に凍えてしがみついている人を綱でからげて、船に引っぱり込んで助けた。
それから四五日も一週間も死骸をこの浜で焼いていた。それは自分たちもよく覚えている。学校も何もなしで村中の人が毎朝、死骸上げに行った。向うの在所からも助けに来たが、この村のいそど（海女）が見つけた死骸はここの浜へ連れて来て焼いた。
「このあたりで」
と私は聞いた。

「ま、その山ないがな。この浜の状態も変ったな。昔のこと思うたら、見る影もないわ」
と話をしてくれた婆さんが云った。
そこへもう一人、婆さんが来た。
「おう来たか」
と芋の皮をむいて食べかけていた婆さんが云った。
「きんにょも来たんか」
「来た」
その婆さんも自分の莫蓙を持参していて、それを砂の上にひろげた。前からいた婆さんがしもうた船のことを覚えているだろうと云うと、今度来た婆さんはもう一隻の船がここの海で難破した時のことを話した。
わしが二十四の時であった。その船に積んであった物がみんなこの浜へ上った。酒の樽がいっぱい上った。やすおじが「おら、何喰わん顔しとるけど、夜さりになると狸と同じで踊り出して来たもんや」と云っていた。いいのは破りもはつりもしないけれど、破れているのはみんな飲んだのやろう。わしゃ知らんけど。
その船には何から何まで積んであった。草履の鼻緒にするこんなぼろまで積んであった。この世にあるものはみんな積んでいた。積んでいないのは馬の角くらいのものやった。
いちばん年取った婆さんは莫蓙の上に横向きになって寝てしまった。芋を食べてしまった婆さんは、あとから来た婆さんとひじきのことを話し始めた。
「おら、ひじき煮て食べるのがほん好きや」
と始めからいた婆さんが云った。

「おらも、ほん好きや」
と後から来た婆さんが云った。
「うちにある大釜にいっぱい煮て食べる」
と始めからいた婆さんが云った。
「あの大釜か」
と後から来た婆さんが云った。
私は火のそばを離れた。
近くの小屋のかげにねんねこで赤ん坊を背負った爺さんが立っていた。赤ん坊は眠っていて、ねんねこの上から毛糸の帽子だけが出ていた。

私がこの前村に来たのは去年の秋、十一月の中頃で、丁度いそどが海に出ていない時期であった。
「もう二週間あとでお出でたら、冬いそが見られるのに」と小安ばあさんが云った。いそどを見たいと思って私はこの村へ来たわけではなかったのだが。
しかし、小安ばあさんは私をもてなすのに取れたてのハマチの刺身を食べ切れないほど作って出してくれたり、身が骨から離れてそり反っている煮魚を鍋ごと出してくれるだけでは、愛想がないと思うらしかった。
私はそれでは今度来る時はなるべく冬いそをやっている間に来ようと思い、小安ばあさんに約束して帰った。

いまは一月、ブロの浜から燈台へ行く道を私は小安ばあさんと並んで歩いている。この人は七十四になるが、背中もしゃんとしているし、足も丈夫だ。この村のいたるところにあるあの急な石の坂道を平地を歩くように登って行く。半纏の袖に両手を入れたままで。

それに私が感心することは、小安ばあさんの身軽なことだ。朝、私が二階から降りて来るのを見ると、ぱっと立って外へ走り出す。顔を洗いに裏の井戸へ行くと、もうちゃんと洗面器に水を汲んで、二杯目の水を汲み上げるために釣瓶をたぐり上げている。

こうして二人で連れ立って歩いていると、小さな子供の時分から小安ばあさんを知っていたような気がする。何だか身内の人のような気がする。

しかし、私が小安ばあさんに会うのは今度が二度目なのだ。それも偶然のことから私はこの人の家に厄介になるようになった。

私は目下のところ、大阪のある放送会社でラジオのプロデューサーをしているが、よく一緒に組んで仕事をやる同僚が一人いる。私よりもずっと年下であるが、気持に細やかなところがあって、二人で酒を飲むと、どういうわけかいつも私の方が先に酔っぱらって、いい年をしていながら女房が自分にどう云ったとか、娘がどう云ったというような愚にもつかぬことを話す。

そればかりではない、滅多に人に話したことのない自分の過去の不始末まで調子に乗ってしゃべってしまう。

去年の夏、新しく始まる番組のことで東京へ二人で出張したことがあった。その時、行きがけの食堂車の中でビールを飲みながら、この年下の同僚が子供の頃、夏休みになると毎年行った海のそばの辺鄙な村のことを話してくれた。

それがこの村で、子供の時の彼が両親や兄や姉と泊ったのが、いま私が泊めてもらっている、歩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com